

専門職養成と実習指導の課題 —事前・事後指導における諸課題の探究

研究代表者 近藤 幹生（実習指導センター）

1. 目的と方法

実習指導センターの研究者による共同研究は、2009年度に続き2年目となる。

2010年度の研究目的は3点ある。第一に、専門職養成における本学実習指導の課題を考察し、各実習指導の質的向上をめざすことである。第二は、実践現場が求める専門職養成の課題を追究することである。第三には、本学実習での事前・事後指導の現状を分析し、実習指導体制の充実をめざすことである。共同研究メンバーによる各論テーマは、次の通りである。近藤幹生「専門職養成における実習指導」、山路千華「幼稚園現場を伝える実習指導—保育指導案の内容の検討—」、古川潤子「求められる介護福祉士像—利用者が求める介護福祉士像—」、主藤久枝「保育士養成課程における事前・事後指導のあり方と保育者の育ち—実習の振り返りと自己評価を通じた学生指導—」、新田さやか「社会福祉実習教育における事前・事後指導の内容と方法に関する考察—学生の「語る」、「聞く」体験に着目して」、石川衣紀「小学校教育実習指導に対する在学学生・卒業生に対する意識調査—」。

研究方法は、文献・資料の研究、他大学実習指導センターの訪問調査、インタビュー、実習現場・実習生へのアンケート調査等による。以下、各研究の概要を報告する。

2. 各研究の概要

(1) 近藤幹生「専門職養成における実習指導体制」

(1) - 1 訪問・調査の概要

A大学・短期大学（兵庫県）、B大学（長野県）、

C大学（東京都）の3実習指導センター（実習教育センター）を訪問した。実習指導担当教員と事務担当者から、指導体制を中心に、面談・インタビュー調査、資料収集及びセンターの見学を行った。

A大学・短期大学は、幼稚園教諭・保育士養成課程があり、4年制大学、2年制短期大学における実習指導センターをもち、本学と共通性を有している。B大学は、小学校教諭養成課程の歴史が長いこと、1年次から現場体験を積み重ね、実習教育センターによる運営が定着していることが特徴である。C大学は、保育士、幼稚園教諭・小学校教諭の養成課程をもつ4年制大学で、実習生が事前指導を受ける実習指導室があることが特徴点である。

インタビューの内容で共通する項目は、「実習指導担当教員と実習センターとの連携上の課題は何か」「実習の事前・事後指導において、課題になっていることは何か」「事前指導において力を入れている内容は何か」等である。

(1) - 2 訪問・調査から得られた視点

インタビューと資料収集を通して得られた視点として、以下の3点をまとめておく。

第一は、学生の主体性を引き出す指導に力を入れている点があげられる。実習手続き、実習中、実習後の振り返りにおいて、学生の主体性を重視している。仮に教育実習を辞退せざるを得ない場合、担当教員、窓口と密接に打ち合わせをしながらも、実習先への連絡は、学生自身が取り組む課題となっている（A大学）。

第二は、実習への履修条件についてである。い

ずれの大学・短大においても、事前・事後指導へ欠席した際の対応は厳しい。欠席した場合、現場実習の評価に関わらず「単位認定の対象にはしない」という基準もある。また、教育実習を履修するまでの1年次、2年次の単位数、成績基準（例6割）を明確化している大学もある。

第三は、事務部門が強化され、学生への連絡、実習先及び実習担当教員との連携を重視している点である。

(1) - 3 課題

事前、実習中、事後指導において、個別学生への指導は、いずれの大学・短大とも力を入れている。本学での実習指導の内容について、担当教員同士の学び合いが必要と思われる。学生指導上の問題で、メンタル面の困難性をかかえるケースも少なくない。この面からの調査不足が課題である。

(2) 山路千華「幼稚園現場を伝える実習指導—保育指導案の内容の検討—」

(2) - 1 問題の所在

2009年度の研究では、「幼稚園現場を伝える実習指導—指導案作成過程の検討—」とし、2009年度入学の白梅学園短期大学保育科1年生を対象に、事前指導の中で「保育を見て記録するという実体験」の試みから、学生の記述力向上について分析した。それは、現場での実習においては、養成校での机上の学びを実践的に活かし、自身の思考を行動に移すという技術が求められるが、机上の学びと現場での行動を学生本人の中で繋ぐことが困難な状況が見受けられ、実習園からも「日誌を書くことができない」「マニュアル化された思考が強く、自分自身で行動を起こすことができない」「保育を自身の経験として捉えることができない」「保育指導案の提出が遅れていて、クラスを任せることができない」などの声が聞かれることから、実習事前の学内オリエンテーションにおいて、学びを自分自身の行為として捉え、実践する機会が必要であると考えたからである。2009年度の研究の結果、幼稚園実習の事前指導の講義において、実習現場で記述する作業に視点をおい

た実技指導により、少なからず学生の観察記録の記述に成長が見られたことが分かった。

昨年の対象学生は、2010年には、指導実習を含む幼稚園実習を行った。そこで、本年は前年度と同じ学生（短大保育科2年生）を対象に、保育指導案立案に視点を置き、事前指導で提示された資料を元に「指導案立案作成の実体験」の試みを行い、昨年に引き続き、幼稚園現場と養成校での学びを繋ぐ実践的な講義を実習指導の中に位置付ける契機とした。

(2) - 2 研究目的

幼稚園実習における事前指導での実践的な学びを学生レポートから分析し、幼稚園現場で活用する課題を明らかにする。その上で、養成校での学びと幼稚園現場での学びを繋ぐ実習指導の在り方や講義内容について具体的な方法を探究することを目的とする。

(2) - 3 研究方法

2009年度の研究の対象学生は、2010年には、指導実習を含む幼稚園実習を行った。そこで、本年は前年度と同じ学生（短大保育科2年生）を対象に、保育指導案立案に視点を置き、事前指導で提示された資料を元に「指導案立案作成の実体験」の試みを行った。

指導実習を含む幼稚園実習事前オリエンテーションの講義の中から、筆者の講義で学生に課したレポートの内容分析を主として行う。本講義では、筆者が「絵本」「手遊び」「歌」などの保育に使用するいくつかの教材についての資料を学生に配布し、それら資料を組み合わせる形で保育指導案の立案を手がける形式でレポート課題とした。学生たちが指導案立案にあたり、具体的に困難となるものは、何か、ということ、本講義でのレポート分析により考察する。

(2) - 4 分析と考察

講義内でのレポートについては、以下の3点において、学生の今後の課題が多く見られた。

- ① 思いを文章という形にすること
- ② テーマを設定できるかどうか

③ 動線のシミュレーションができるかどうか

まず、①については、指導上の配慮のほとんどが、自身の声かけを口語のまま会話にして記述してしまうということが多く見られた。その声かけの意図を文章にすればよいということを理解するのに指導を要した。②については、たとえば教材それぞれを選ぶに当たっての目的や意図は明確だが、ねらいから活動の全般を通しての目的や意図を達成するための教材選びになっていない場合が見られた。③については、指導案の組み立てはできているが、そこに保育者となる自分自身がどう関わり、子どもたちの動きとどのように重なっていくかという、具体性に欠如しているものである。まとめると、②については、保育の技術をとにかくちりばめてしまう傾向と、③については、理論に偏重している傾向があるといえる。

これらのことから、学生が指導案立案を考えるときに、個々の学生が思いを形にするために支柱とするものが何であるのか、を明確にさせることで、その学生の課題がある程度、明確になるということといえるのではないだろうか。その上で、①に関わる「文章化」というところに辿り着くと考えられるが、「思い」を「文章」にすることについては、昨年度の本研究での効果が関わる部分である。このように、幼稚園実習はおおかたの養成校が2回に分けて実施しているが、それぞれのポイントとなる学びの継続、積み重ねによって、最終的な実習の成果が得られるものと考えられる。また、その積み重ねの先にこそ、学生自身が「思い」のない保育は「形」にならない、ということをもつて学ぶことで、小手先の技術の羅列ではない保育観に裏付けされた保育を想像する力が付き「その人の保育」がうまれるのではないだろうか。

(3) 古川潤子「求められる介護福祉士像—利用者が求める介護福祉士像—」

(3) - 1 概要

2006年厚生労働省社会保障審議会の報告書の中でこれからの介護福祉士の養成にあたっての目

標として「求められる介護福祉士像」として記された12項目を下に、昨年実施した本学の介護実習提携施設の介護実習指導者への「求められる介護福祉士像」を調査した。その結果をもとに今年度は、介護実習生への「求められる介護福祉士像」の意識付けによる一事前・事後指導における諸課題の探求—について指導内容を検討し学習効果を図った。また、介護福祉士に専門性の必要があると考えている介護実習指導者に、利用者から求められる介護福祉士像とは何かを検証した。

(3) - 2 研究内容

本学の介護実習提携施設の介護実習指導者2名へインタビューを実施した。利用者から求められる介護福祉士像とは何と思うか伺ってみたところ、「利用者のニーズを深く理解できる」、「専門的知識を持っている」という回答を得た。また利用者から良く評価されている介護職員の傾向として「高い倫理性があり対応に一貫性がある」や「責任感があり現場で必要とされる実践的能力がある」などが挙げられ、その多くが介護福祉士資格を取得しているとの事であった。必要な事は厚生労働省社会保障審議会が示す「求められる介護福祉士像」として記された12項目に一致する事になる。本学の第Ⅲ期介護実習前に実習生に「求められる介護福祉士像」12項目（厚生労働省社会保障審議会）を提示し理解した上で実習を実施してもらった。

その学生に実習後「求められる介護福祉士像」12項目を知らないで行った実習と知ってから行った実習に変化があったか問うと、「自分が将来、介護福祉士として何が必要なのかを考えて実習を行うという意識を持った」と答えた。具体的には、実習指導者や介護職員の援助方法の観察や実習指導者からの指導内容を以前にも増して意識を持ち、学生自身の気づきがあり積極的学ぶ事ができたと話す。

その結果、実習先の介護福祉士の行動や思想をより深く観察し、将来の自分（介護福祉士になった自分）を重ねる事ができ、「求められる介護福

社士像」を目標に置き実習する事ができた。

(3) - 3 結果

実習をよりよい効果的なものにしていくために、実習施設と実習指導担当教員が実習生の自主性・主体性を尊重しつつ、実習開始前から実習終了後を通して密接な連携を図っていく必要性を痛感する。また学生に対し自己の将来像を実習前後の教育に組み込むことで、より質の高い「求められる介護福祉士像」への教育効果を上げるのではないかと考える。

(4) 主藤久枝「保育士養成課程における事前・事後指導のあり方と保育者の育ち—実習の振り返りと自己評価を通じた学生指導—」

平成23年・24年の導入を視野に、保育所保育指針に対応した保育士養成課程の改正が進められ、平成22年3月に、国の検討会の報告書「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」が出された。

この中間報告を受け、埋橋（埋橋.2010）は2年間の保育士養成期間で学ぶ「基礎」とその後の経験や学びで高める「専門性」を指摘した。さらに、現場の実践知を養成の場につなぐ意義にも焦点はあてられ、「保育の質の向上を図る」ことにつながる、保育士の自己評価の必要性とそのあり方についても論議されている。

増田（増田.2010）は、現場保育士の自己評価で大切なものとして、「自らの保育実践の意味を読み解き、そのよさや効果を明確にしたうえで、より質の高い保育に向けて課題を明らかにすること」としたうえで、「出来ないことを指摘される評価、やらされる評価からの脱却」が求められるとしている。さらに、保育を担う一人ひとりの保育士の実践知を、これから保育士になろうとする実習生に伝承していただく事が、改正養成課程の意図する効果を上げるために必須であるとしている。

このことから、養成校在学中の実習生に対しても、実習を通じて保育士の実践知が伝承されているか否かを立証していくことが養成校には求めら

れるのではないか。つまり、増田が先に述べた「出来ないことを指摘される評価、やらされる評価からの脱却」を念頭にした、実習時の自分の姿勢及び自主課題を振り返るという2つの観点から、学生自身が自己評価を行うことが大切であると思われる。

以上のことから、養成校と保育現場が連動し、両者において人材を育成し保育士の質の向上に努める必要があると示唆される。

(4) - 1 問題と目的

実習後には、実習園における反省会・実習評価・学内反省会は行われているが、それらがその後の指導及び実習に十分に活かされているとは言い難い。本学では多数の資格取得に伴う実習が行われているが、それぞれの実習に共通して反映される実習指導上の改善点もあると思われる。

その一つに「学生による振り返りと自己評価」をあげる。学生は学習及び実践を通して専門分野における基礎知識を身につけ、主に実践の現場から保育士としての基本姿勢を学ぶ。その後自ら実習を振り返ることにより、課題を自覚し次に行われる実習あるいは現場実践につなげていく。そのような学びの積み上げができるよう、有益な方法で振り返り及び自己評価を行うことが必要である。

平成23年度より導入される新カリキュラムにより、保育実習指導に演習が加わり時間数も拡大される。この演習科目を視野に、保育士としての基本姿勢及びコミュニケーション能力、さらに保育所の社会的役割の理解など、保育士の資質や保育所理解を深める演習内容を工夫していく必要がある。

さらに学生の生活・社会的マナーの見直しなど、従来は家庭教育の一環とされてきた「しつけ」の範囲に及ぶ指導も、養成校が担わざるを得ない必要性も生じている。

保育実践者としての実践力と専門性、一般常識を兼ね備えた社会性を高め、保育士の質の向上につながる事を視野に、養成校での学びをより実践

につなげていけるような工夫が実習指導の中に求められると考える。その一つに実習の振り返り・自己評価を挙げる。振り返り作業から自主課題を振り返ることにより、次に臨む実習への課題や目標・目的を明確にする。また自己評価により実習に臨んだ姿勢はどうであったか、学生自身で自覚する事により、さらに充実した実習につなげていくことができるのではないかと。評価を受けるだけでなく、自身で気づき実践すること、それが何よりも学びの向上につながるのではないかと。

また自己評価は、実習評価の基準として挙げられている項目と同項目を、学生自身の視点からも評価を行い、双方の認識を比較することにより、そこから具体的な学生指導法も見えてくるのではないかと。

(4) - 2 本年度の実践

「保育所実習Ⅱ」を前に、本学の子ども学科3年生および保育科2年生は、実習指導（以下、実習オリエンテーションと記す）において、2009年度に行われた「保育所実習Ⅰ」の振り返りを「保育所実習Ⅱの課題作成のワークシート」という形を用いて行った（2010年度の「保育所実習Ⅰ」の振り返り実施時期は、「保育所実習Ⅱ」に向けた実習オリエンテーションの中で行われた）。振り返りでは「頑張って取り組んだことや、学び」として実習内容そのものを振り返り、最後に「保育所実習Ⅱ」に向けての課題が明確になったか否かを、学生に問う項目を設けた。また自己評価では、実習先における評価基準にもなっている、「姿勢」「援助」「資質・適正」の点からいくつかの項目について自己を評価し、その評価に至った理由と今後の改善点を記入する。保育所実習Ⅰの振り返りについては、個人による振り返りを踏まえて行う、グループワークの時間を持った。

さらに本年度は、「保育所実習Ⅱ」終了後にも実習オリエンテーションを設定し、「保育所実習Ⅱ」についての振り返りおよび自己評価を行った。

今年度（2010年度）の保育所実習Ⅰ（子ども学科2年生・保育科1年生対象）の実習の振り返り

及び自己評価は、昨年度（2009年度）履修学生の実施時期とは異なる、実習終了後（2月下旬より実施中）に行っている。

(4) - 3 今後の課題

今年度（2010年度）より試みた、実習後の振り返り及び自己評価の結果は、「保育所実習Ⅱ」に備えた課題を明確にする際、学生各々に活用されていた。しかし、今後はさらに実習の振り返りや自己評価の方法・内容の検討を行っていく必要がある。実習に対する意欲の向上と課題の明確化につながる振り返り及び自己評価の持ち方を検討し、指導を受けるだけではなく、学生が自身で気づき自発的に学ぶあるいは改善するという機会として位置付けて行きたい。

また、振り返りや評価の実施時期についても考慮する必要がある（昨年度1月に実施された「保育所実習Ⅰ」については8カ月後の、2010年度10月の実習オリエンテーションで実施。「保育所実習Ⅱ」においては、実習終了直後に実施された）。「保育所実習Ⅰ」の振り返り及び自己評価については、実習直後に行うことにより学生の記憶が鮮明である中で行う事ができる。しかし「保育所実習Ⅱ」に備えた、直前の実習オリエンテーション（「保育所実習Ⅰ」実施年度の翌年度）で振り返る事により、目前に控えた実習に備える事ができる。それぞれの両時期で実施を試み、結果どちらがより学生にとって有効的であるかを考え、進めて行きたい。

学生自から自己課題を見つけることにより、意欲的かつ自主的に学ぶ姿勢を持ち、養成校で学んだ理論と現場で培われる実践力を統合し、専門性を持った学生の質の向上につなげたいと考えている。

今後の実習指導においては、さらに実習実施前および実習実施後の自己の振り返り及び評価のより効果的な方法を探求し、作成・実践していきたいと考える。

（参考資料：自己評価シートは省略）

(5) 新田さやか「社会福祉実習教育における事

前・事後指導の内容と方法に関する考察—学生の「語る」、「聞く」体験に着目して

(5) - 1 本学の社会福祉援助技術現場実習指導および現場実習の構成

本研究では、共同研究の3つの目的のうち、3点目「本学実習における事前・事後指導の現状を分析し、解決すべき諸課題を明らかにすること」を中心に取り組む。ことに、本学の社会福祉援助技術現場実習指導（新カリキュラムでは相談援助実習指導）における事前・事後指導の現状分析を進めながら、その内容と方法の考察を試みる。

本学の社会福祉援助技術現場実習（以下、現場実習）は現在、子ども学部子ども学科学生が対象となっており、実習は3年次の春休み（現場実習Ⅰ）、4年次の夏休み（現場実習Ⅱ）の2回に分けて行われている。実習の事前事後指導である社会福祉援助技術現場実習指導（以下、実習指導）は3年次の前・後期、4年次の前・後期にわたって開講されている。このなかで3年次の前・後期の実習指導は実習Ⅰに向けた実習前指導、4年次前期は実習Ⅰの事後指導と実習Ⅱにむけた事前指導、4年次後期は実習Ⅱの事後指導の位置づけを有している。今年度（2010年度）の研究では本学の社会福祉実習教育における事前・事後指導の内容について、学生の「語る」体験、「聞く」体験に着目した。

(5) - 2 現場実習体験を「語る」/「聞く」、現場ソーシャルワーカーの話を「聞く」ことの意義

高木（2000：114）が述べるように、社会福祉援助技術現場実習は「『臨床的』体験学習」という側面を有する。様々な生活課題を抱えるクライアントの生活の場に赴き、あるいは生活の場（施設）で援助実践は展開される。そうした「臨床」の現場に実習生として入っていく学生たちが実習前の段階において現場実習の実際、現場の実際に触れる機会は必須といえる。

本学の实習前指導では、学生の実習先理解を進めるためのプログラムとして現場実習を終えた4

年生の実習報告をこれから実習に臨む3年生が聞く、現場で働くソーシャルワーカーの話を聞く時間を設けている。現場実習Ⅰを終えた4年生にとって実習報告を行うことは実習後指導のプログラムとなり、そこでは自らの現場実習体験を振り返り、実習を通して得られた気づきを仲間、後輩、教員らに向けて語る作業となる。

みずからの実習体験を「語る」ために、学生たちは実習での体験を振り返り、実習の場で出会った言葉や場面を多面的に捉え、意味づけ、考える作業を行っていく。報告では、自らがクライアントに寄り添い、向き合う中で生じた葛藤、自分の価値観や考え方・関わり方の特徴、クライアントの言動の背景にある事柄など、それぞれの体験による個別具体的な気づきが語られていた。そのような報告を「聞く」体験を通して、学生たち、ことにこれから現場実習に臨む3年生はソーシャルワーク実習および「臨床」現場への想像力と創造力を養い、実習を通して得られる気づきに近づくことになる。さらに、現場で働くソーシャルワーカーの話しを「聞く」体験によって、学生たちは様々な生活課題を抱えながら生活を営む一人ひとりのクライアントの状況、そうしたクライアントを支援する専門職が置かれている現状、現場で積み重ねられてきた実践知、様々な生活課題が生み出される社会的背景などを知ることになる。

(5) - 3 「体験」を聞くプログラムを実施するうえでの課題

2で述べた実習指導プログラム、特に実習報告、現場の話を「聞く」プログラムを進めていくうえで課題となるのは、学生たちが「聞いた」ことを聞きっぱなしにせず、それらの体験を実習に向けた自分の課題として内面化していくことができるかどうか、という点にある。授業の進め方として、実習報告を聞く、現場ソーシャルワーカーの話を聞く、いずれの回も語り手（4年生、現場ソーシャルワーカー）が聞き手（学生）に向けて体験を語る→質疑応答を行う→聞き手は感想をワークシートに記入するという流れで進められ

る。質疑応答の時間は語り手と聞き手の双方がやり取りする場として設けられるのだが、実際、質問を発する学生は少ない。「体験」を聞く場を学生一人ひとりの主体的な学びの場として作り上げていくためには、語り手まかせではない授業の進め方が求められるといえよう。

実習を経験した学生たちの言葉は、実際に援助が展開される場面で感じたジレンマ、現場で働くソーシャルワーカーたちから受け取った対人援助の醍醐味、現場で沸き起こってきた様々な感情など、自分の体験を通して紡ぎだされた生々しさをもつ。また現場で働くソーシャルワーカーが語る言葉には、日々現場で起きているクライアントとのやり取り、自らの生活を懸命に営もうとする人びとから発せられる言葉や思い、現場で働く人たちが抱える困難など、現場のリアリティを伝える力強さがある。そうした言葉を「聞く」ことはまさに「臨床的」体験学習の一環として位置づけられよう。

現場実習の体験や現場の話聞いた後に、語られた言葉を学生たちが自分の中で吟味し、各々がどのような点に共感し、あるいは違和感として受けとめたのかを実習指導メンバーで共有していく作業が必要となる。そうしたプロセスを経て「聞く」こと、「語る」ことの体験は社会福祉実習教育における意味を持ってくるのではないだろうか。次年度は、本年度収集した社会福祉実習教育に関する文献を読み込みながら、「臨床」現場と大学をつなぐ実習教育の内容と方法についての考察を深めていきたい。

【文献】

高木邦明(2000)『障害者福祉と実習教育の展開』中央法規

(6) 石川衣紀「小学校教育実習指導に対する在学生・卒業生に対する意識調査一」

2010年度に小学校教育実習を行った子ども学科4年生56名にたいしてアンケートを行い、今後の実習指導の課題を明らかにすることを目的とした。

まず実習に行く前に「小学校実習」についてどう考えていたかという問いにたいして、「指導案の作成が大変」「授業をきちんと行えるか心配」「寝る時間がない」といった回答が多くあがり、実習生としての毎日の実務に不安を抱える学生が多かったことがうかがえた。

また実際に小学校を見て自分のイメージと違って驚いたことは何かという問いにたいしては、「先生たちがやさしい」「子どもが素直、落ち着いている」「見えないところでの先生たちの仕事が多い」といった回答が寄せられた。このことから、特に小学校全体の雰囲気や様子、子どもの実態等について、学生のイメージと実際とで距離があったことがうかがえた。

これら二つの回答傾向からわかることは、実習指導の段階で小学校の具体的な様子(小学校とはそもそもどのような場所か)について学生に丁寧に伝える時間をもっと準備できるとよりよかったのではないかということである。小学校へいくのは自分が小学生だったとき以来という学生もあり、イメージをつかめきれずに漠然とした不安だけを抱えたまま実習に向かった学生が少なくなかった。実習指導には学生と実習先をつなぐ役割もあり、小学校そのものについてできる限り具体的なイメージを持って実習に臨めるような事前指導が求められているといえる。

また「実習で一番勉強になったこと」に対する回答では、「教えることの難しさ」や「子どもから学ぶ・教師も子どもと一緒に学ぶ」といった観点の内容が、ひとつの傾向として浮かびあがった。実習を通して子どもたちとかかわりをもつことによって、自分が教師としてどう在るべきなのか、現場で何が求められるのかを実践的に学ぶ重要な機会とすることができたのではないだろうか。

アンケートや実際の学生の様子からみえてくるのは、実習に行く前は非常に不安を抱えつつも、実習が終わるとそれが得難い経験としてきちんと学生の中に定位しているということである。そこで学生と現場の様子を少しでも縮められるような

実習指導を充実させていくことにより、大学での学びと実習先での実践をよりスムーズにつないでいくことができるのではないかと考える。

3. 考察と課題

(1) 各論においては、実習指導センターの訪問調査、指導案作成とその検討、求められる専門職像の把握、実習の自己評価、聞く体験・語る体験、意識調査などが示された。実習分野が異なるが、事前・実習中・事後指導において、共通する側面がある。それは、学生の主体性を育てる指導方法のあり方を追究することである。

(2) 実習への履修条件については、とりわけ4年制大学の各実習指導の現状から、検討を要する課題があるのではないかと考える。

(3) 実習教育と実習事務部門との連携の重要性はいうまでもない。実習学生及び実習施設・機関数の増加、実習種の広がりの中、より効率的な実務体制の確立が必要である。実習指導体制全体の検討の中に事務体制の課題を位置づけていきたい。

以上、2010年度共同研究の報告とする。

男性保育者の歌声の実態に関する研究

保育科 鈴木 慎一郎

本研究では、男性保育者の歌声に関する実態調査を行い、男性保育者の歌声における音域の実証的検証を行うことを当初の目的とした。しかし、この目的を究明するには、地声と裏声の「喚声点」の問題を明らかにすることが先決であると考え、当初の研究計画を変更し、保育者養成機関における「喚声点」の問題を含めての発声指導の実態を史的に考察した。

大正から昭和にかけては、草川宣雄が「頭声発声」、福井直秋が「中声発声」を主張し、発声に関する先進的な実践が積極的に行われた時期である。「児童唱歌コンクール」も開催された。このような状況の中、教員養成の場においてどのような発声指導が実践されてきたかについては、先行研究においても十分明らかにされてこなかった。

発声に限定した文部省検定済師範学校用音楽教科書が1種類のみある。それは1932(昭和7)年に共益商社書店から発行された水口廣『中等発声練習教本』である。本研究ではこの教科書を分析することで、教員養成の場における発声指導の内容を明らかにすることを目的とした。

水口に関する先行研究はほとんどない中、岩

崎洋一によって、水口が児童発声における中声発声の支持者として取り上げられている(岩崎1981)。また岩崎によると、水口は昭和の初期頃、熊本県の天草において中声発声の講習を行ったとのことである(岩崎2000)。この点からも、水口が当時の発声指導に対し影響を及ぼしていた実践家であったことがうかがえる。

研究方法としては、第一に『中等発声練習教本』の教材分析を行い、教科書の特徴を明らかにした。第二に水口の実践家としての側面に着目し、水口の発声指導の実際について考察した。

以上の研究結果については、日本声楽発声学会『声楽発声研究』第2号(2011年3月)に発表した。

今後は、音楽教員としての水口のライフヒストリーにも焦点を当てて研究を深めると同時に、今日の保育者養成機関の抱える発声指導とも関連付けて、実践研究を継続していきたい。